

— 合宿導入講義 —

詩と哲學の恢復を

— 現代青年の課題として —

福岡縣立水産高校教諭 占部賢志

一、合宿参加者のアンケートを讀んで

二、當代學風への疑問

(1) アメリカ教育使節團報告書（昭和二十一年三月三十一日）

① 〓日本の教育の目的および内容〓 個人の知性は、忠誠心や愛國心と引き換へに賣り渡してしまふには、あまりに貴重である。／われわれが、あらゆる社會階層において強く支持されてゐることを發見した新しい型の教育においては、出發点は個人ではなくてはならない。

② 〓國語の改革〓 この世に永久の平和をもたらしたいと願ふ思慮深い人々は、場所を問はず男女を問はず、國家の孤立性と排他性の精神を支へる言語的支柱をできる限り崩し去る必要があるものと自覺してゐる。

ローマ字の採用は、國境を越えた知識や思想の傳達のために大きな貢獻をすることになるであらう。

(2) 奥田克巳（工學博士）『科學の限界と日本の教學』

科學は外界を見る學問、したがって、すべてを物として客觀的に冷靜に見る學問であり、存在の學問であるが、教學は主觀的に、すなはち感情をも含めて我を内省する學問、したがって心の學問、または價値の學問である。

(3) 岡潔(數學者)「春風夏雨」

一九二九年の晩春、私は日本を發つてフランスへ渡るため、インド洋を船で回る途中、シンガポールで上陸して独りで波打際に立っていた。

海岸には高いヤシの木が一、二本ななめに海に突き出っていて、ずっと向うの方に床の高い土人の家が二、三軒あるだけの景色だった。私は寄せては返してうまな波の音に、聞き入るともなく聞き入っていたのだが、不意に何とも名状しようのない強い懐しさの氣持にひたってしまった。これが本当の懐しさの情なのだといまでも思う。土井晚翠が「人生旧を傷^{いた}みては、千古替らぬ情の歌」とうたったのも、この氣持にほかならない。

この強い印象こそ、歴史の中核は詩だということをも、また詩というふしぎな言葉の持つ内容の一端を、一番明らかにしてくれているのではなからうか。私にはそう思われる。この中核を包む歴史の深層は、美しい情緒のかずかずをつらねる清らかな時の流れであり、そして私はごく幼いころ、私の父からそれを教えられたように思う。

三、私の内的體驗から——言葉と留魂のひびき——

(1) 「留魂録」(吉田松陰)に觸れて

(2) 三島由紀夫氏の言葉(昭和四十五年五月・對談)

「今の日本では言葉を糺すといふこと以外にもう道はないと思ひつめてゐる。」

四、若き吉田松陰の詩魂と學問

(1) 道を學び己れを成すには、古今の跡、天下の事、陋室黃卷にて固より足れり。豈に他に求むることあらんや。顧ふに、人の病は思はざるのみ。則ち四方に周遊すとも何の取る所ぞと。曰く「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは觸に従ひて發し、感に遇ひて動く。發動の機は周遊の益なり」と。西遊日記を作る。

(「西遊日記」—序—嘉永三年九月)

(2) 且つ日本歴史・軍書類尤も力を用ふべきもの由、或る人に聞き候へども、未だ及ぶに暇あらず。其の人云ふ、「御藩の人は日本の事に暗し」と。私輩國命を辱むる段汗背に堪へず候。

(「兄杉梅太郎宛」書簡嘉永四年九月)

(3) 客冬水府に遊ぶや、首めて會澤・豊田の諸子に踵りて、其の語る所を聴き、輒ち嘆じて曰く、「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」と。歸るや急に六國史を取りて之れを讀む。古聖天子蛮夷を懾服するの雄略を觀る毎に、又嘆じて曰く、「是れ固に皇國の皇國たる所以なり」と。

(「來原良三に復する書」嘉永五年六、七月頃)

五、合宿教室に何を學ぶか。

合宿導入講義追加資料

(1) 鑑軒先生を訪ふ

經を説き、史を論じ、又兵を談ず。着實の工夫、細評を得たり。侍坐端なく、閑話久し。月輪來り照らす此の心の明（西遊詩文）

(2) 十二月十二日晴。池部に至る。宮部來る。相伴ひて莊村に至る。談話深夜に至る。是の夜、月明朗、單行して清正公に詣づ。豪氣甚し。宿に還れば人定る後なり。（西遊日記）

(3) 武士の一身成立、覺東なき譯左の通り。

一、是れ迄學問、逆も何一つ出來候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故、方寸錯亂如何ぞや。先づ歴史は一つも知り申さず、此れを以て大家の説を聞き候處、本史を讀まざれば成らず、通鑑や綱目位にては垢めけ申さざる由、二十史亦若幹なるかな。頃目とばとば史記より始め申し候。（中略）矩方も兵學をば、大概に致し置き、全力を經學に注ぎ候はば、一手段之れあるべく候へども、兵學は誠に大專業にて經學の比に非ず。且つ代々相傳の業を恢復する事を圖らずして、願つて他に求むる段、何とも口惜しき次第申さん方もなし。方寸錯亂如何ぞや。體中の骨何本之れあるかは存せず候へども、十本許りも折れ候はば、跡はいかきくひ候猫の様に成り申すべくや。是れも一つの懸念。（中略）僕學ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動搖を定めんと欲す。萬祈萬祈。（嘉永四年八月十七日「兄杉梅太郎宛」）

(4) 余は則ち自ら誓ひし所を行ふ、國家に負くを顧みざるには非ず、誠に丈夫の一諾、忽せにすべからざればなり。夫れ大丈夫國を出ては、一言にて以て國を榮すべく、又以て國を辱むべし。國家榮辱の係る所、豈に區たる一身の故ならんや。（東北遊日記）

吉田松陰略年譜（嘉永三年～安政元年）

嘉永三年（一八五〇）二十一歳 八月二十五日、萩を發して九州遊學の途に上る。小倉、佐賀、大村、

長崎、平戸、天草、島原、熊本、柳川、久留米等を歴訪。熊本にて宮部鼎藏と相知る。

十二月二十九日、歸家。「西遊日記」あり。

嘉永四年（一八五二）二十二歳 三月五日、安學研究のため藩主に從ひて上府。四月九日、江戸に達す。

「東遊日記」あり。安積良齋、山鹿素水、佐久間象山等に從學。島山新三郎、宮部鼎藏などと交はる。十一月十四日、藩の許可書を得ず亡命して東北遊歷の途につく。

嘉永五年（一八五三）二十三歳 四月五日、江戸に歸る。水戸、會津、新潟、佐渡、秋田、弘前、青森、盛岡、

仙臺、米澤等を歴訪。「東北遊日記」あり。五月十一日、歸國命令により萩に歸り罪を待つ。歸來盛に國史を研究す。十二月九日、亡命の罪により士籍世祿を奪はれ父の育となる。藩主、松陰の才識を惜しみ、内諭して十年間諸國遊學を請はしむ。

嘉永六年（一八五三）二十四歳 一月二十六日、萩を發して諸國遊歷の途に上る。讃岐、摂津、河内、大和、

伊勢などを經る。五月十四日、江戸に入る。「突五遊歷日録」あり。六月四日、ペリー來航を聞き、浦賀に直行。九月十八日、海外視察のため、いそかに來泊中のフチャイチニの軍艦に投せんとして長崎に赴く。「長崎紀行」あり。十二月十三日、萩に歸りついで京都に赴く。十二月二十七日、江戸に入る。

安政元年（一八五四）二十五歳 三月五日、金二重之助と白米泊中のペリーの軍艦に投せんとして

成らず翌日自首して、縛にづく。